

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同研究課題

「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合」

第2回研究会要旨 (2017年9月16日)

「ドゥルーズの著作群における内在概念の考古学的探査」

近藤和敬 (現代哲学)

本発表において、情動、生といった概念をダイナミズムにおいて考えなおす一つの哲学的試みとしてのドゥルーズとガタリの内在の哲学について、とくにその「内在」概念の意味論的内実を特定するために、ドゥルーズの著作群におけるその使用様態の考古学的探査から、その使用の差分と重層性を明らかにしようとした。そのうえで、本発表においてはとくにそのもっとも重要な内実の一つと目されるスピノザにおける内在の哲学を、ドゥルーズがどのように考え、それが晩年のガタリとの思索にどのようにつながるのか、ということについてその導入的な議論を行った。

「創造的アーカイブについて：芸術資源の記録と利用」

佐藤知久 (文化人類学)

発表者は、2017年4月より京都市立芸術大学芸術資源研究センター (以下「芸資研」) にて、芸術資源の創造的アーカイブ化とその利用・活用に関する研究に従事している。ここでの基本的な問いとは、現代において芸術的な創造活動を記述／記録／保管／継承するとはどのようなことか、というものである。

モダン・アート (近代美術) なるものが、それぞれの創造活動における表現媒体 (絵画なら平面性、彫刻なら立体性など) ごとにその表現手法と内容とを洗練させ、その結果として長期保管に耐えうる物質的作品を制作することだと定義しうるなら、おおよそ1960年代以後に現れるコンテンポラリー・アート (現代美術) とは、こうしたメディウム・スペシフィシティの束縛が解かれて以後にあらわれる創造的活動、すなわち表現媒体を問わないポスト・メディウムの活動として、ひとまず定義できる。ポスト・メディウムの状況としての現代美術とは、ひとつのメディウムにこだわらないこと、さまざまな表現手法を混成させること、時間とともに推移する要素をもつこと、そして何よりも作品としての物質的持続性を必ずしも持たない活動として特徴づけられるだろう。

多元的な表現手法を組み込み、展示場所や展示される土地に固有な形で設営されることも

数多く、そして何よりもパフォーマンスな次元（タイムベースな表現、身体的表現、鑑賞者との相互作用などをふくむ）を組み込んでいくために、美術館に長期にわたって収蔵・保管することが現状ではますます不可能になっていくこうした現代美術の創造活動を、どのようにして記述／記録／保管／継承できるのかという問いは、このような背景をもっている。芸術資源研究とは、こうしたポスト・メディア的な現代美術の状況における創造的活動をどのように記述／記録／継承できるのか、そしてその記録をどのようにつぎなる創造へ向けた資源として活用しうるのかに関する、具体的／理論的な探求である。

ところで、ここで問題とされる現代美術の創造活動とは、ある意味でダイナミズムを持つ生そのものでもある。必ずしも芸術を主要な研究テーマにしてこなかった発表者がこうした研究に携わることになったのも、パフォーマンスな出来事の記述／記録の問題が、人類学において長く論じられてきた民族誌的記述の問題と密接に関連しているからだ。パフォーマンスな要素を多く含む現代美術「作品」においては、見ることとしての鑑賞だけでなく、作品を身体的に感覚することや、作品の一部に鑑賞者が参加することも近年少なくない。作品の記述行為と、フィールドワークにおける参与観察ならびに民族誌的記述の行為とはますます接近したものになっており、その意味で現代芸術の領野とは、人類学的な研究の蓄積をこれから具体的に活かす研究フィールドであるともいえるだろう。

本報告においては、上記の点について説明したのち、事例として、芸資研が関わっている2つの現代美術作品のアーカイブプロジェクトについてとりあげた。

第1の事例は、國府理（1970-2014）が2012年に発表した「水中エンジン」という作品である。これは、実際の自動車から取り出されたガソリンエンジンを透明な水槽のなかで稼働させるという作品であり、稼働のためにはエンジンを物理的に改変する必要があるだけでなく、その都度の操作が不可欠、というものである。

オリジナルの展示では作者の國府が常に作品の不具合をメンテナンスしつづけ、その不安定な作動状態は原子力発電所の危険性を想起させるものとして、震災後の芸術表現のなかでも高く評価されてきた。だがガソリンエンジンを水中で動かすという作品であるがゆえに、美術館に収蔵することが不可能であるだけでなく、オリジナルの展示以後はエンジンが破棄され、さらに2014年には作者の國府が永眠し、作者ならびにオリジナル作品自体がすでに不在となっている。インディペンデントキュレーターの遠藤水城を発案者とする実行委員会（遠藤水城、アーティストのヤノベケンジ、実際の再制作を担当した白石晃一、HAPSのはがみちこ、芸資研の高嶋慈によって構成される）は、この作品を再制作して蘇らせるとともに、この作品についての多面的な記述／記録／アーカイブ化を行ってきた。

この事例において興味深いのは、作品を収蔵・保管するのとは異なる保管と継承のあり方として、作品そのものを反復する、という実践のプロセスが強調されている点である。実行委員会の遠藤水城はそれを、「永続性」としての美術館モデルに対して、「反復するというニーチェ的なモデル」と呼んでいる。反復としての継承というモチーフは、本発表の質疑応答でも指摘されたように、儀礼的行為に通じるものであり、出来事の継承方法とし

ては馴染み深いものだとも言えるが、現代美術の領域（あるいは近代的な個人的主体性の世界）では、作者と作品のオリジナリティをめぐる言説・法・制度が根深く作品の周囲をとりかこんでおり、今回の水中エンジン再制作においても、その作業の主体とは誰かという問題が浮上し、反復による継承というモデルとのあいだに緊張関係を生んでいた。

具体的にいえばそれは、作品の微小な変更をめぐる論点として存在する。作者の國府が詳細な指示書を残さなかったこともあって、実際の制作プロセスは独自の改変を数多く含んでいる。そこで実際の展示場面では、そうした変更箇所を詳細に記述したキャプションを付与して展示が行われたが、どれほど変更のプロセスを詳細に説明したとしても、芸術作品の再制作においては、作品のディテールにおける微少なズレが避けがたく存在してしまう。今回の再制作では、こうした微細な変更プロセスを丁寧に記録するアーカイブ作業を同時に進行させることで、オリジナリティと作者性の問題に対する対処を試みており、その意義は充分にあると発表者も考えているが、根本的には問題の解決には至らないものだといえる。

第2の事例は、芸資研が2017年度秋からセンターとしてとりくむプロジェクトである。これはダムタイプというパフォーマンス・グループの「pH」（1990～1995）という作品に関するものである。同作品はpHは12人のメンバーによってつくられた約70分のパフォーマンス作品であり、現代美術の領域で高く評価され、欧米での海外公演も多数行われた。

pHは主に3つの要素から構成されている。第一の要素は物理的な装置であり、そこにはスライドプロジェクターと照明を埋め込んだ2つの「トラス」や、映像が映写される壁などが含まれる。装置のなかでもっとも特徴的な要素であるトラスは、地上高45センチ／2メートルの高さを水平移動し、床面やパフォーマー（3人の女性、2人の男性）の身体に映像を投影するとともに、かれらの動きを抑制／妨害する。第2の要素はパフォーマーたちの動きであり、これは第3の要素である音楽（生演奏をふくむ）と密接にシンクロしながら、物理的な装置のなかで繰り返される。

このようにpHは、きわめて複雑な要素から成り立つパフォーマンス作品だが、1995年の最終公演以後、物理的装置は解体されて現存せず、またこれまでの調査で、全体を統括して記述するような文書も存在しないこと、作品の上演ごとに新しい要素が付け加わり／削除され、時間とともに変化しつづけたものであることがわかっている。また作品において中心的メンバーのひとりだった古橋悌二（1960-1995）は他界している。

今回のアーカイブプロジェクトでは、本作品に関する資料の収集、メンバーへの聞き取りだけでなく、残された記録映像をもとに本作品をPC上で再現するデジタルシュミレーターの制作と、オリジナルのパフォーマーによる、振り付けに関する記述／記録方法の開発に取り組む予定である。本プロジェクトはこれからはじまるため、その詳細について発表することはできなかったが、デジタルなレベルにおける再制作ともいべきシミュレーターだけでなく、長期的には実際の再演（遠藤のいう「反復」としての）も視野に入れつつ、そのための資料としてアーカイブ化を行うため、水中エンジンと同様、脚本や指示書にあ

たるテキストを持たないパフォーマンスの再制作においても、作者性やオリジナリティの問題が発生する。この作品のアーカイブ化の成果については、いずれ別の機会に報告したい。

あらためて述べれば、こうした作品の記述／記録／アーカイブという作業が求められているのは、現代美術における創造的な活動の多くが、美術館という制度によっては継承不可能な要素を含むからである。美術館に収蔵可能な作品のみが後代において 21 世紀の美術史を構成していくなら、それは明らかにバランスを欠いている。近年、研究者のみならず、美術館やアーティスト自身のなかでも、現代芸術作品や活動のアーカイブ化をめぐる問題が熱心に論じられるようになってきたのは、それが記憶と歴史の継承というより大きな問題にもつながっているからである。今回の発表では作者性とオリジナリティの問題、再制作や再演を通じた作品の反復の問題といった点についてしか触れることができなかったが、芸術資源に関する研究は、芸術の領域にとどまらず、現代のテクノロジーを用いた記録や記憶をめぐる問題、ひいては、出来事の社会的な継承に関する文化装置や制度の問題など、より大きな問題系に接続していくものである。創造的な記述／記録／アーカイブの問題は、芸術の領野にとどまらない展開の可能性をもっている。